

## 「共存」の境界線——アッコー・フリンジ演劇祭2017

村井 華代

### はじめに

本稿は、2017年にイスラエルのアッコー・フリンジ演劇祭（以降単に「演劇祭」「フェスティバル」）で起こった事件とそこに至った経緯について、『ハアレツ』英語版を主資料として、不足部分をヘブライ語版で補い整理、報告するものである。原語であるヘブライ語版を副とするのは、許された時間に比して筆者の語学力が不足であるためだが、それでも報道を基に性急な報告に踏み切るのは、これが現下進行中のイスラエル演劇の危機的事態であるからに他ならない。渦中の人であるイナト・ヴァイツマンの『パレスチナ、イヤーゼロ』が2017年10月に東京で上演された後でもあり<sup>1</sup>、日本におけるこの問題への意識の高まりの一助となればと思う。

2017年のアッコー演劇祭の事件とは、そのイナト・ヴァイツマン（Einat Weitzman, \*1973）——ユダヤ系イスラエル人の女優、劇作家、左派活動家——の新作『占領の囚人たち』（Prisoners of the Occupation）の上演が、演劇祭運営委員会によって排除されたこと、それを機に起こった一連の出来事を言う。

ヴァイツマンは、パレスチナ人の声に寄り添った作品を発表し、現在の政権から「暴力を煽動し、テロリスト団体をサポートしている」と指弾されている。パレスチナ寄りの作品を上演する劇場への公的助成を打ち切ることによって弾圧する姿勢を隠さない強硬派の文化スポーツ大臣文化ミリ・レゲヴ（Miri Regev, \*1965）にとって、ヴァイツマンはいわばマーク対象である。そんな中、2017年のアッコー演劇祭は、ヴァイツマンの新作が「占領」と「パレスチナの囚人」を扱っているという理由で上演を拒否した。これを演劇に対する政治の介入として、芸術監督が辞任、その他著名な演劇人が軒並み抗議のために参加を撤回した。一方、新しく任命された芸術監督モニ・ヨセフ（Moni Yosef, \*1957）の指揮の下、演劇祭は政府見解と衝突しないプログラムを組んで開催に漕ぎつけた。長くユダヤとアラブの「共存」のシンボルとされてきた演劇祭は、2017年のそれを実行した人々とボイコットした人々の間に深い亀裂を残した。

筆者がイスラエルで演劇を見るようになったのは2012年、このアッコー演劇祭でのことである<sup>2</sup>。それから、この演劇祭にはほぼ毎年通い、この矛盾に満ちた国家において演劇がどのような可能性を持つかの啓示を受けてきた。それゆえに2017年、この異常事態の報には足下が揺らぐ思いだったが、それでも事実を見届けるために10月のアッコーを訪れた。

演劇祭の会場、パンフレット、町の光景、すべて一見、いつもと変わるところはない。だがラインナップには昨年までと異なる顕著な傾向があり、観客は驚くほどに少ない。パッケージは同じだ

が中身が全く違う、それはえも言われぬ異様な感覚だった。

本論の目的は情報の整理と呈示である。だが、数年後には、この出来事が一過性の熱病であることがわかり、本論の記述も単なる過去の記録でしかなくなっていることが筆者の願いである。以下、『ハアレツ』英語版は英語、ヘブライ語版は日本語で署名者と掲載日を記した。WEBサイトのURLは全て2017年11月末現在で確認されたものである。

## 1. 「別の」イスラエル演劇

アッコー・フリンジ演劇祭——複数の英名があるが、最も一般的な“Acco Fringe Theatre Festival”に従う——は、1980年、俳優・演出家オデッド・コトレル (Oded Kotler, \*1937)<sup>3</sup>の企画・設立によって創始された演劇祭である。ユダヤ歴「第七の月」に祝われる「仮庵祭」の休日期間中（西暦のほぼ10月）、イスラエル北部のアッコー市で4日間の日程で行われる。

アッコーは前3000年頃には交通の要所とされた古い港湾都市で、現在はオスマン朝支配時代に作られた海沿いの旧市街（2001年ユネスコ世界遺産登録）がメインの観光地である。演劇祭の主会場は、その旧市街の中にある1104年建造の十字軍要塞——エルサレム王国最後の砦として1291年に陥落した——遺跡の地下にある。「騎士堂」「クリプト」等12世紀の区分をそのまま生かした空間で、選抜された10作ほどのコンペ参加作品、加えていくつかの海外からの招聘作品が終日上演される。

フェスティバルには周辺街路を使つての無料のストリートパフォーマンス、地元学校の生徒の公演、近隣の西ガリラヤカレッジを使つての終日のシンポジウム等が組み合わせられ、この演劇祭の期間中、人口約55000人の小さな町に、イスラエルを代表する演劇人、研究者、国中の演劇ファン、他の都市から大型バスで乗りつける観光客が集まり、地元住民もまた親子連れで夜遅くまで楽しむ。アラブ系とユダヤ系の住民が混交するアッコー市の「共存」のシンボルとして知られてきた。

ところで複数ある英名のうち The Acco Festival of Alternative Israeli Theatre がヘブライ語の逐語訳に最も近い。だが、“Alternative”は完全に適切な訳ではなく、本来使われているのは「Other」を意味するヘブライ語「アヘル」である。実際、過去の公式HPでは、演劇祭の理念は次のように謳われていた。

このフェスティバルの目的は、独自の、新しい、或いは異なる言語を探究する芸術作品を披露することにある。当フェスティバルは、演劇の概念の境界を検証し、押し広げる作品、多分野協同による作品、演劇的空間・演出・観客-上演の関係に対して独自のアプローチを示す作品を奨励する。(Cited in Shem-Tov, 2)<sup>4</sup>

つまりこの演劇祭の原義は、「境界」を揺るがし、その範囲を拡張して「他の」在り方を実現してゆくことにある。当初、この「目的」は純粋な演劇美学を念頭に置いて作られたであろう。だが

イスラエルの特殊な前提条件は、この演劇祭を否応なく様々な社会的「他者」との「境界」批判へと向かわせ、またアッコー旧市街というアラブ系のホストコミュニティを得たことで、演劇祭はその「他者」との「境界」を予め不可避要因として内在化してもいた。

だがそのトポス上の運命は、偶然によるものだった。当初コトレルが開催地に選んでいたのはアッコーではなく、「芸術祭を創造し消費する優位集団に社会的に近い」(Shem-Tov, xiii) エイン・ホドの芸術家村<sup>5</sup>だったが、1980年、当時のリクード党政権のコンセプトと「地域復興再生計画」に基づき、文化省がアッコーをホストタウンとしたのである。民族が混交し、発展の遅れたこの町に特色ある観光資源をもたらすのが目的であった。(Shem-Tov, xiii-xiv)

この(いわば“植えつけられた”)演劇祭を「共存」の祭典にしたのは、皮肉なことにインティファダだった。第一次インティファダの勃発の2か月前に行われた1987年のフェスティバルでは、芸術監督のシモン・レヴィ (Shimon Levi) は、それまでヘブライ語だけだった上演作品にアラビア語の作品を入れ、審査員にアラブ人女優を迎え、パレスチナ占領をテーマとした作品を取り上げた。勃発の翌年、開催は当然懸念されたが、芸術監督エラン・ベニエル (Eran Beniel) はレヴィの路線を踏襲した。彼はフェスティバルを円滑に行うために「共存」を強調、初めてユダヤとアラブのティーンエイジャーのコミュニティシアターを作った。この演劇祭がユダヤとアラブの「共存」を——シェム・トヴの言葉を借りれば「文化的多様性を無視し、国家的カテゴリーのみを強調して」(Shem-Tov, 176) ——ポリシー化したのは、ユダヤとアラブの緊張の産物だった。

2000年9月末、第二次インティファダが勃発する。アッコーでも大規模な暴動が起こり、10月14日に予定されていた演劇祭の開催はやはり危ぶまれたが、メディアはむしろユダヤとアラブ「共存」の象徴が崩壊することへの恐怖を訴えた。(Shem-Tov, 178) 結局、当時の芸術監督ロニ・ニニオ (Roni Ninio) の決断により、この年の演劇祭は11月最初の週末まで延期して開催された。この頃にはアッコー演劇祭は、文化的事業というより象徴的に“開催されねばならない”存在へと拡大している。

だが、2008年には再び危機が訪れた。この年もアッコーで演劇祭開催直前に暴動が起こった。仮庵祭の5日前、飲食を含む全ての労働を止めて慎まねばならないとされるユダヤの最重要祭日「大贖罪日」<sup>ヨム・キブール</sup>に、アラブ人が大音量の音楽を鳴らしながら車を運転していたところ、ユダヤ人のグループがその車に石を投げつけ、暴力沙汰になった。それをモスクの放送が誤って「アラブ人がユダヤ人に殺された」と市民に知らせた。これをきっかけにアラブ人がユダヤ人を襲ってユダヤ人が報復、暴力の応酬の中で大勢の負傷者と逮捕者を出した。2003年から現在までアッコー市長を務めるシモン・ランクリ (Shimon Lankri) は、警察が開催に支障はないと判断したにもかかわらず、「お祭りをやっている時じゃない」と演劇祭を中止した。(Shohat, Oct. 12, 2008)

この経緯については、ユダヤ人ランクリ市長が翌年の選挙での票固めのために敢えて中止を選んだという見方が大勢を占めたようだ。暴動を起こしたアラブ系住民は、そのために自分たちの重要な「かき入れ時」である演劇祭を失い、中止はアラブ系住民に対する一方的「懲罰」としての意味を持ったからである。(Shem-Tov, 188-190)<sup>6</sup>

この措置に反発したアラブ系政治家は、代替の演劇祭を告知した。結局、12月に規模を縮小して演劇祭はおこなわれたが、この事件は「共存」に内在する両民族の緊張関係を改めて思い知らせることになった。(Reiter, 287)

だがこうした困難な来歴ゆえに、アッコー演劇祭は、単なる文化イベントとしての意義をはるかに超え、「共存」のシンボルとして維持されてきたと言える。しかしながら、2017年、演劇祭を再び襲った危機は、それまでの危機とは全く異なる。それはユダヤ系住民とアラブ系住民の対立からではなく、イスラエル社会と一地方都市の演劇祭、その公共のシステムそのもののひずみの中から出てきたものだった。

## 2. ミリ・レゲヴ

2017年アッコーの事件の経緯を説明する前に、そのメインロールを演じた人物の一人、第4次ネタニヤフ内閣文化スポーツ省大臣ミリ・レゲヴについて述べておかなければならない。2017年カンヌ映画祭のレッドカーペットに、エルサレムの風景が描かれたドレスで登場して世界を驚かせたことは記憶に新しい。

2015年5月14日のレゲヴの就任以来、どう控えめに表現しても、イスラエル演劇は彼女に振り回されてきた。就任時、彼女は「国家イスラエルやIDF [Israel Defense Force] 兵士、またユダヤ人の民主主義国家たる国家伝統のイメージを損ねることに手を貸すつもりはない」と公言した。(Ashkenazi, May 18, 2015) それはその後の事実から言えば、パレスチナに同情的な作品を上演する劇場への助成を停止すること、さらに簡単に言えば、彼女の考える「ユダヤ人の民主主義国家たる」イスラエルの「基本的価値観」に外れる作品全てに圧力をかけることを意味していた。以下はその代表的な事件である。

### 【ケース1】アル-ミダン劇場『平行時間』

アル-ミダン劇場 (Al-Midan Theatre) は、1995年、当時の首相イツハク・ラビンと文化相シュラムイト・アロニが、アラブ文化促進のためにハイファに設立したアラビア語劇場である。問題の作品『平行時間』(A Parallel Time) は、パレスチナ解放人民戦線のメンバー、ワリド・ダッカ (Walid Daka) が獄中で書き、WEB上に発表した著作を基に、アラブ系の劇作家・演出家バシャーール・ムルクス (Bashar Murkus, \*1993) がアル-ミダンで初演した。ダッカは1984年、19歳のIDF兵士モシェ・タمام (Moshe Tamam) を拉致、拷問の末に殺害したとして終身刑が確定している (本人は直接の関与を否定)。

実在の、しかも服役中の「敵」が主人公ではあるが、教育省から学校の観劇レパトリーに選ばれた実績を持ち、11年生から12年生の生徒 (ほぼ日本の高校2～3年に相当) 約900名が既に観劇している。が、2015年4月、タمامの姪と活動家らが上演停止を求める抗議行動をおこなったことがきっかけで、アル-ミダンに対する公的助成打ち切りを検討する議論がハイファ市議会で始まる。その議論に、就任する前のレゲヴが突如 Facebook (以下FB) 上からこう発言してきた。

あの劇場は、終身刑判決を受けた囚人、兵士モシェ・タマム殺害の実行犯、人殺しのワリド・ダッカの劇を上演しました。……そしてテルアビブ大学では、学生がナクバとパレスチナ難民の帰還をテーマとする映画を出してくる。こんなことを終わりにして、テロリスト、売国奴、テロを支援する団体を助成するのをやめ、教育、文化、スポーツの分野におけるこの問題の基準を明らかにする時が来たのです。(Cited in Ashkenazi, May 18, 2015)

アル-ミダンというより、パレスチナ問題について国家イスラエルを批判した演劇作品全体を「終わりに」するという、あからさまな宣言であった。結果的に、ハイファ市は5月初めアル-ミダンへの助成凍結を決定、そして第4次ネタニヤフ内閣発足後、新教育相ナフタリ・ベネットは学校観劇プログラムからの除外を決定し、レゲヴは文化省からの助成を停止した。(Skop and Ashkenazi, Jun 1, 2015)

ムルクスは「この国では、この手のことで驚きはしないよ……今回普通でないのは、とても露骨で明白で、隠していないのがわかることだ」、「自分が民主主義の中に生きているのではないということがよくわかった」と語った。(Ashkenazi, Jun. 11, 2015)

助成を失った劇場はそれでも2016年を子供向け野外ショー等でしのぎ、2017年1月、再び『平行時間』とヴァイツマンの『パレスチナ、イヤーゼロ』をレパトリーとして不屈の復活を見せた。(Ashkenazi, Jan. 9, 2017) が、2017年11月現在、再び活動を停止している。

## 【ケース2】 ノルマン・イッサとエルミナ劇場

アル-ミダンが学校観劇プログラムから削除されたのと同じ2015年6月初め、アラブ系の俳優ノルマン・イッサ (Norman Issa, \*1967) が、自らが主演するハイファ市立劇場『ブーメラン』のヨルダン溪谷入植地での公演に出演することを拒絶、ハイファ市立劇場は公演中止を発表した。

グリーンライン (国際的に承認されている1949年停戦ライン) を越え、いわゆる違法入植地の舞台に立つことを拒絶するイスラエルの俳優は珍しくない。その場合、劇場は出演を強制するのではなく代役を探す。だがハイファ市立劇場は国民の人気俳優イッサの代役探しを断念、公演日程を取り消して「その責任をイッサになすりつけた。」(Handelzaltz, Jun. 18, 2015)

レゲヴ大臣は即座にFBで反応、イッサが考えを変えないなら、彼の設立した劇場であるエルミナ劇場への支援を再考する、と述べた。(Stern, Skop and Ashkenazi, Jun. 10, 2015)

エルミナ劇場 (Elmina Theatre) は、イッサとその妻で劇作家のギデオナ・ラズ (Gideona Raz) がヤッファに設立した、子供のためのヘブライ語・アラビア語による二か国語劇場である。ヤッファは両民族が共存する古い港町で、文化的共存への意識も高く、二か国語劇場として1998年設立のヤッファ劇場 (Jaffa Theatre) という先例がある。イッサはアラブ人、ギデオナはユダヤ人で、夫妻はその言葉通り「ユダヤとアラブの共存に人生の全てを捧げてきた」。(Stern, Jun. 9, 2015) しかしレゲヴが提示してきたのは、夫妻が2年間の審査を経てようやく得た公的援助資格

を剥奪するか、イッサが入植地の舞台に立つか、という異様な交換条件だった。

当初「私が良心に背いて出演に同意するなどと思わないでほしい」(Ibid.)とイッサは言ったが、レゲヴや演劇関係者との議論の場が設けられ、数日後には彼が翻意し、入植地での公演を受諾したことが伝えられた。(Bernstein, *The Time of Israel*, Jun. 12, 2015)

2017年7月には、エルミナ劇場そのものがヨルダン溪谷での公演を行うことが発表された。劇場は「どこであれ、この劇場の劇と、他者を受け入れ人々を結びつけるというメッセージを舞台に上げる場所があるなら、喜んで上演します」との声明を出し、レゲヴはそれを歓迎して「国はヤッファだけでなく、アリエル [筆者注：大規模な出演ボイコットが起こったことで知られる入植地] でもヨルダン溪谷でも、共存を推進し支援します」と応じた。「基準は私が定め、お金の行く先も私が決めるのです。政府が文化を支援しなければならないわけではない。アーティストが私に指図することはありません。」(Cohen and Branovsky, *Israel Hayom*, Jul. 20, 2017)

### 【ケース3】ヤッファ劇場、ヴァイツマン、ダリーン・タトゥール

ヤッファ劇場は先述の通り、ヤッファの二か国語劇場である。2017年9月、文化省からの訴えに応じ、財務省の法律アドバイザーはこの劇場の複数のイベントが「ナクバ法」に抵触している可能性があるとして、代表者のヒヤリングの間、助成停止とすることを進言した。最終的判断は財務大臣モシェ・カハロン (Moshe Kaharon) に委ねられる。(Ashkenazi, Sep. 6. 2017)

「ナクバ」は周知の通り、1948年5月15日のイスラエル建国と同時に始まったパレスチナの「大災禍」を意味する語だが、「ナクバ法」は2011年に国会を通過した「予算基本法第3条 (b)」の通称で、公的資金を受けた団体がユダヤ人の民主主義国家としてのイスラエルを公然と拒絶した場合、またはイスラエル独立記念日を嘆きの日とした場合、財務省がその団体の助成を縮小する権力を持つことを規定している。(Ibid.)

「ナクバ法」違反と目されたヤッファ劇場の二つのイベントは、この年、『占領の囚人たち』でアッコー演劇祭を締め出されたイナト・ヴァイツマンがプロデュースしていた。一つは6月、彼女はアッコーで上演できなくなった『囚人』を基に、参加者がイスラエルの刑務所に収監されているパレスチナ人囚人の手紙を読みあげるといもの (Ashkenazi, Sep. 6, 2017)、もう一つは8月、パレスチナの女性詩人ダリーン・タトゥール (Dareen Tatour, \*1982) との連帯を示すためのものである。タトゥールは、2015年11月、FBとYouTubeへの3つの投稿が「暴力を煽動し、テロ組織を支援している」として逮捕され、翌年1月に開放されるも、以来イスラエル国内に兄が借りた住居に軟禁されている。(Maltz, Sep. 6. 2017) タトゥールの解放を訴える運動は、広くWEB上で共有された。

9月8日付の『ハアレツ』社説 (英語版) は、物議を醸した「ナクバ法」発効から6年半、一例も適用がなかったにもかかわらず、レゲヴとカハロンの「この危険な検閲連合」によってついに「実践の局面に入った」ことを重く見て、広く連帯を呼び掛けている。

芸術の世界はヤッファ劇場を囲んで団結しなければならない。現実から目をそらし、観客にただの娯楽、抑圧された作品、現実否認を提供してはならない。アッコー・フリンジ演劇祭のアーティストと監督らから示された異例の連帯は、早くも死につつあるが、それとは違い、これは文化的世界が決して失敗することのできないテストなのである。(Editorial, Sep. 8, 2017)

「テスト」と社説は呼ぶが、アル-ミダンとイッサの事件が起こったとき、40年間『ハアレツ』の劇評家として活躍してきたミハエル・ハンデルザルト (Michael Handalzalts, \*1950生) は、既にこれを「戦争」と呼んでいた。「文化省は間違いなく、イスラエル演劇と戦争をしようとしているらしい。」(Handelzaltz, Jun. 18, 2015)

そのように言うならば、「戦況」はアッコー・フリンジ演劇祭からのヴァイツマン排除を一つの転換点として、新たな局面に突入したのである。2017年のアッコーの事件と、ここまでに述べた事例が大きく違うのは、事件はレゲヴの非難コメントから始まったのではなく、アッコー演劇祭が「共存」の理想の下に自発的に行った左派排除であるということだ。ここでの「共存」とは、アラブ人やパレスチナとのそれではなく、世界中から集まり多様を極めるイスラエルのユダヤ人同士のそれを指す。2017年のアッコーは、皮肉なことに、これら二つの「共存」への理想が衝突する戦場となる。しかもこれによって、レゲヴの「戦争」は、イスラエル演劇に、予期せぬもう一つの戦いを招くことになったのである。

社説は連帯を「死につつある」と言うが、10月5日、その週に始まるアッコー演劇祭を明らかに意識して、ヤッファ劇場で助成停止プロセスへの反対集会が行われ、テルアビブ市長ロン・フルダイも含め約400名の人々が集まった。11月末現在、まだヤッファ劇場へのヒヤリングは始まっていない。「テスト」はなおも継続している。

### 3. 2017年アッコー演劇祭

では、2017年のアッコーでは何が起こったか。以下新聞の日付は特記のない限り2017年を指し、典拠がヘブライ語記事である場合は日本語で署名者と日付を記す。

発端は、2016年のアッコーのコンペに出品されたヴァイツマンの『パレスチナ、イヤーゼロ』(Palestine, Year Zero) だった。描かれているのは常態化されたイスラエル軍によるパレスチナ人の家屋破壊。3人のアラブ人俳優が家屋を失った様々な人物に成り代わり、アラビア語でその記憶を語る傍ら、主演のジョージ・イブラヒムが土地会計士としてその被害状況を淡々と書き留めてゆく。彼の会計事務所は、破壊された故郷の記憶(段ボール箱に入った瓦礫に表象される)で埋め尽くされている。

家屋破壊の描写は、言うまでもなく現実の記録に基づく。が、暴動を煽るような表現は一切ない。アッコーでの初演時、小さな空間を埋めた観客は、温かな——決して熱狂を誘う作品ではない——スタンディングオベーションで作品を讃えた。1960年代の子供番組でユダヤ人からもアラブ人からも愛されながら、第一次インティファダ以来イスラエルでの仕事を拒絶していたイブラヒ

ムの復帰だけでも、観客には喜びであっただろう。

2016年の演劇祭を目前に控えた10月初め、この『パレスチナ、イヤーゼロ』に、「国家の名を傷つけ、そのシンボルを侮辱する煽動的メッセージを含む」という告発があったとして、レゲヴのスタッフが調査に入った。(Shpigel and Ashkenazi, Oct. 7, 2016)

告発したのは、シャマイ・グリック（活動名：シャイ・グリック [Shai Glick]）という、ユダヤ人権団体「ベツァルモ」の設立者でもある右派活動家である。彼は舞台を見ておらず、ナクバに関する啓蒙活動を行っているイスラエルのNPO「ゾクロト」(Zochrot)のニュースレターで公演を知った。ゾクロトは、彼の言い方では「国家を転覆させ破壊するヴィジョンを持つ」団体である。彼はレゲヴに手紙を書き、「あなたがゾクロトのワークショップから出た劇に助成金を出すと知って仰天しました」「劇は全体 IDF によるガザやエルサレムの家屋破壊を扱っていますが、ユダヤ人を、我々の息子や兄弟を殺すミサイルがこれらの家々から発射されたことは言うのを忘れるのです」「フェスティバルから上演を追い出してください」等々と訴えた。(Ibid.)

だが『パレスチナ、イヤーゼロ』を審査した文化省の担当官は「問題なし」と判断、上演は予定通り行われた。イブラヒムはその演技によって最優秀主演男優賞を受賞している。

この一連の介入について、アッコー市と演劇祭側は「表現と創造の自由を遵守しており」、そして「出品作は芸術委員会と連携した芸術監督によってのみ選出される」と改めて強調した。「演劇祭経営陣は〔芸術監督の〕プロフェッショナルリズムを信頼し、劇の内容が法を犯すものであれば、過去と同様、市が対応します。」(Ibid.)

だが2017年、運営委員長シモン・ランクリ市長は、2016年と同じ芸術監督アヴィ・ギブソン・バルエル (Avi Gibson Bal-El, 通称「ギブソン」) がこの年の演劇祭で上演すると決定していたヴァイツマンの新作『占領の囚人たち』を失格として上演をキャンセルした。その第一報を4月26日、ヘブライ語ニュースサイト「NRG」が伝えている。(クラウス, 4月26日)<sup>7</sup>

同サイトによれば、アッコー市が『囚人』をキャンセルした理由は、「この町のユダヤ人とアラブ人の間に煽動と緊張を引き起こしかねず、都市の公共の祭典としてふさわしくない」という判断からだったが、運営委員会からは「『囚人』を入れたままでは」助成金は得られない」との発言も記録されている。さらに記事は次のように付け加える。

300編 [実際には170編] の劇が [4名からなる芸術] 委員会に提出されたが、フェスティバルに選出されたのはたった9編、それが文化省、ミファル・ハパイス [宝くじ収益による文化振興カウンシル]、アッコー市の資金を受ける。また俳優たちは、NRG360に対し、毎年のように左派の劇作家の作品ばかりが選出されると語った。(同上)

同記事は、前述のシャイ・グリックが、再びレゲヴに「過激派グループではなく、万人にふさわしい内容に変えてくださるように」と訴えたことも付言している。(同上)



この決定の背景に2016年のレゲヴとヴァイツマンの経緯があることは自明だったが、それでもすべてはランクリ市長と運営委員会の主導で進んだと思われる。運営委員会の越権行為であることも自明だったが、ギブソンは何のコメントも出さなかった。そのまま3週間が過ぎ、5月16日、ついに演劇祭からヴァイツマン排除の決定について正式な声明が出された。同時に、抗議の声が相次いだ。(アシュケナジ, 5月16日)

テルアビブのフリンジを代表するトゥムナ劇場 (Tmuna Theater) のキュレーター、ヤイル・ヴァルディ (Yair Vardi) は、監督やアーティストは「抗議のために辞任すべき」と訴え、劇場が「自己検閲」に向かっていることへの警鐘を鳴らした。「自ら検閲しなくとも、彼女 [レゲヴ] は我々一人ひとりの心に検閲への恐怖を浸透させている。」(ヴァルディ, 5月21日) トゥムナは前年11月、ヴァイツマンを登場させたイベントで文化省から調査対象とされた経緯がある。(Ashkenazi, Nov. 11, 2016) ヴァルディ自身、その「恐怖」の当事者だった。

5月24日、運営委員会は改めて『囚人』失格を宣言する。最終決定は、委員会の投票によって——あくまでも民主主義的手続きによって——決せられたと言う(ただし運営委員会の多数派は市の関係者)。この投票結果に、過去に芸術監督を務めた2名の運営委員メンバー、シモン・レヴィと振付家ダニエラ・ミハエリ (Daniella Michaeli) が抗議辞任した。(アシュケナジ, 5月24日)

5月30日、コンペ参加8作品のうち6作品のアーティストが、ヴァイツマンをプログラムに復帰させないなら参加を撤回すると委員会に迫った。(アシュケナジ, 5月30日) だが決定は覆らなかった。

6月4日、ギブソン芸術監督は辞任した。報道からは彼の具体的行動を読み取るのが困難だが、いずれにしても辞任は彼が運営委員会と芸術委員会、そして参加アーティストとの間に立って議論を継続することに意味がなくなったことを示していたのだろう。彼と同時に芸術委員会メンバーである俳優ヨセフ・アブ・ヴァルダ (Yosef Abu-Warda) も辞任、そしてコンペに参加するはずだった8作品のアーティストは、全員が出品を取りやめることを発表した。(アシュケナジ, 6月4日)

ギブソンらの態度表明に対し、独立劇場プロデューサー連盟 (通称「EVE」) と、イスラエル俳優組合 (通称「SHACHAM」) という二つの団体が共同声明でギブソン他ボイコットを選んだアーティストたちへの支持を表明し、アッコー市を「侮辱的かつ非民主主義的」と非難した。「フェスティバルは創設以来一貫して表現の自由を守り、共存と協力のシンボルとなってきた。」「[運営委員会の決定] は、フェスティバル全体を揺るがし、その存在そのものが問われる状況を招いた。」(Ashkenazi, Jun. 5, 2017)

6月5日、芸術委員会のメンバーで演出家のマルティン・モギルネル (Martin Mogilner) と、3名のストリートイベント監督のうちの一人ヨアブ・バルテル (Yoab Bartel) も辞任を表明する。この離反者の行動に共鳴し、この夜、カメリ劇場の俳優が終演時に舞台上で観客に向かって離反者への連帯を表明し、観客に「国家イスラエルの表現の自由」を守ってほしいと訴えた。この日、ベエル・シェバ劇場でも同様のアピールが行われている。(アシュケナジ, 6月6日)

6日、レゲヴとランクリはアッコー市で共同記者会見を開いた。レゲヴは「私が代表している、  
政府の正気コル・ハ・サフワイの声を上げさせてくれた」とランクリ市長を賞賛、その上で彼女はアッコー演劇祭を強化する優遇策を打ち出すことを約束した。(Shpigel, 6月6日)「イスラエル社会には数多の魅力的な物語があるのに、いつも出てくる話といえば、占領、占領、占領。もうたくさん」とレゲヴは言った。(Shpigel and Ashkenazi, Jun. 7)

ランクリも「持論が受け入れられず、表現の自由の名を借りて、アーティストのコミュニティ全体に今年のフェスティバルに参加しないよう呼びかけている過激なグループ」を非難した。ランクリによれば、彼らは演劇界における地位を失うのを恐れ、若いアーティストを道に迷わせてきた。「大きな愛をもって、私は若いアーティストを招き入れる。あの旧時代のアーティストなぞ無視してフェスティバルに参加するように。」(Ibid.)その上で、170もあった今年のエントリー作品の大部分が、ガイドラインで推奨しているにもかかわらず、「エチオピア人、女性、入植者、移民、宗教的な人々、貧困層、辺境地」(Shpigel, 6月6日)といったテーマを無視していたと告げた。

一連の出来事について、ヴァイツマンはFBでコメントを出した。「レゲヴは占領の話にうんざり。みんな占領の話にうんざり。私は占領について書くのにうんざり。だから取引しましょう。彼女は内閣の大臣だから、パレスチナ人と正しい、歴史的妥協のための計画を進める。そして私はまたチェーホフをやるの。」(Shpigel and Ashkenazi, Jun. 7)

6月半ばになって、ギブソンに代わる新しい芸術監督としてアッコー・シアター・センター (Acco Theatre Center, 以下「ATC」) 主宰の演出家モニ・ヨセフ (Moni Yosef)<sup>8</sup>就任が報じられた。(アシュケナジ, 6月14日)

ATCは1985年、アッコー生まれの俳優・演出家ダヴィド・マアヤン (David Maayan) が俳優モニ・ヨセフ、スマダル・ヤアロン (Smadar Yaaron), ハレド・アブ・アリ (Khaled Abu Ali) と共に設立した。旧市街の十字軍要塞と同じ庭園に面して建てられた劇場は、演劇祭の事務局と会場の一部を兼ねる。ヨーロッパで大きな名声を勝ち得た *Arbeit Macht Frei vom Toitland Europa* はこの ATC 設立者らが1991年にアッコーで初演したものである。(参照: Rokem, 56-76)

ヨセフは1998年からヤアロンと共に ATC 芸術監督をつとめ、演出家として社会に対する大胆な批評性を特徴とする——ヨセフ自身の言葉で言えば「ボーダーを押し広げ、イスラエル社会のはらわたに手を突っ込む」(Ashkenazi, Sep. 15)——作品を発表してきた。のみならず、アッコー演劇祭の芸術監督経験者でもあった (ヤアロンと共同, 2009-2012年)。今や誰もやりたがらない役職を、誰より適任といえるヨセフが引き受けたことを、演劇祭総監督アルベルト・ベン・シェルシュ (Albert Ben-Shlush) は大いに喜んだ。(アシュケナジ, 6月14日)

だがボイコットを決めた側から見れば、ヴァイツマンを排除して開催される演劇祭の芸術監督を受託したヨセフは“裏切者”である。が、「ATCとしてではなく、プライベートな個人としてやらなければならないと決めた」とヨセフは言う。(Ashkenazi, Sep. 15) 事実、ATCは、ヨセフがこの任を受けたのは「私的個人として、アッコーの一住民として」選んだことで、劇場そのものは

「[[辞任した] アーティストたちへの連帯を示すため今年のアッコー・フェスティバルには参加しません」と告知を出した。(アシュケナジ, 6月14日)

ヨセフは最初のうち、離反したアーティストらを呼び戻そうとしていた。が、その努力を放棄させたのは、6月18日、『ハアレツ』ヘブライ語版に掲載された女優ラミス・アマル (Lamis Ammar) の寄稿文「アッコーの新芸術監督はこの町のアラブの口封じに協力している」だった。ラミスはアッコー出身で、今回出場を撤回したアーティストの一人である。

悲しいのは、あなたのように30年前にアッコーに来て町の一員となり創作に加わった人が、軽率にも創造の自由を代価に、アッコーを自分の個人的出世の道具にしたことです。結局のところ、市長や文化省にお給料を頼っている人が、彼らに代わって、また芸術のコミュニティ全体に敵対するポピュリストのイデオロギーのために働いて、私たちには自分がアッコーのために誠実にやっていると思ってもらおうと思ってるなんて、とんでもない話です。(アマル, 6月18日)

アマルは、1966年までこの地域を支配していたイスラエル軍を引き合いに出し、ヨセフを「軍事統治時代の啓蒙的支配者」になぞらえ、「私たちアッコーのアラブ人が、教養あるユダヤ人にフィルムを売るために芸術上の権利を手放すだろうと思っている」と書いた。(同上) アマルはヨセフに翻意を促し連帯を呼びかけたのだが、逆効果となった。

アッコーの住民を「私の家族」と言い切るヨセフは、アマルの「一線を越えた」言葉を「自分と旧市街の住民との仲を裂こうとする」「一種の暴力煽動」と捉えた (Ashkenazi, Sep. 15)。彼にとって最も重要な課題は、この演劇祭がパレスチナ問題にコミットすることではなく、アッコーで演劇祭を開催し続けることそれ自体だったのである。その真情は公式 HP に書かれた言葉に直接に現れていると思える。

イスラエル最大の演劇の祭典は止められることはありません。

アッコー・フェスティバルは、アッコーで行われているからこそ、比類なき演劇の祭典なのです。……今年のフェスティバルを、アッコーに住む全ての人々、ユダヤ人とアラブ人を問わず、誰よりもまずこのフェスティバルが帰属する人々に捧げます。この33年間アッコーで暮らし創作をしてきて、この町と人々への私の愛は大きくなる一方です。<sup>9</sup>

それから2カ月が経った8月27日、『ハアレツ』ヘブライ語版にて新プログラム決定が報じられた。メインは例年のコンペではなく、新芸術監督ヨセフと彼が集めた新しい芸術委員会 (ATC 設立者の一人ハレド・アブ・アリを含む) の募集に応じた作品の中から選ばれた8作品の上演となり、それを囲むように、ギリシャ、NY、マケドニアからの3つの招聘公演、終日のストリートパフォーマンス、そしてシンポジウム等のイベントが例年通り配置された。就任から2か月、3つの

演劇関係団体（EVE, SHACHAM, イスラエル演劇連盟）による演劇祭ボイコットの呼びかけが行き渡っており、その逆風と圧倒的な時間不足の中でのプログラムだった。

選ばれた8作品は記事で以下のように紹介されている（タイトルと劇団名は、公式HPが公表している英名で表記）。

イガル・エヴェン-オル（最近カメリ劇場とハビマ劇場で上演された『肉屋』他の作者）の新作 *On the way to the festival one stops at Vulgariya* は、今回の騒動を直に描き、アッコー演劇祭のボイコット破りを決めた演劇制作者に何が起こったかを検証する。アサフ・フリードマン作、アミハイ・エゼル演出の *The City of Fortune* はエリ・ヴィーゼルの著作に基づき、ハンガリーの故郷に戻ってきたショアーの生存者を扱う。

イナト・キルシュネル-ゴルドベルク演出 *Until we find a place* はアーティストであり作家でもあるシラ・カハナ、リアト・レイボヴィッツ、ゼハヴィト・ケレン、タマル・ブガッチの出演で、4人による女性の世界を描く。劇団 Three Points による *Material for Conversation* は、セクシュアル・ハラスメントに苦しんだ女性たちの法廷での証言からの断片を交えつつ、二人の女性とセックス中毒の学者を描く。出演する俳優はモルデハイ・タمام、テヒヤ・スリマン、マリア・ロゼンフェルドに加え、イハブ・ハスキヤ [筆者注：劇団のゲストで、今回唯一のアラブ系俳優] も参加。アミハイ・ハザン作、シャハル・レハヴィとアサフ・パニエル参加による *TiKun Chatzot* は、立ち退きを前に緊急避難空間となる、ある入植地のシナゴークを描く。バラク・ベン・ダヴィド作・演出による *LO (r) CA* は、スペインの詩人・劇作家ガルシア・ロルカの物語に基づく「同性愛悲劇」とされる。アリエルの劇団 Matara はレオン・アゴレンスキーの *WoMan* をアレクサンデル・カプラン演出で上演、性別適合手術を受けようとしている男性を描く。ニコル・マーレルのダンス作品 *Thisability* は、ヘレン・ケラーの物語にインスパイアされたもの。（アシュケナジ、8月27日）<sup>10</sup>

筆者が観劇した結果を交えて言うならば、若い世代による時事パロディ *On the way to the festival one stops at Vulgariya* と、車椅子のハンディキャップ女性が健常者女性ダンサーたちをリードし、身体的健常への明瞭なアンチテーゼを呈示する *Thisability* は別として、他の作品に全体的に目立ったのは性とジェンダーを扱ったもの、そして正統派ユダヤ教徒の劇である。イスラエルの世俗派と宗教派、その双方のユダヤ社会におけるタブー、もしくは無視されがちな問題を取り上げた意欲的な作品が選ばれたことは事実であろう。一方、占領問題の劇が姿を消した代わりに、西岸入植地の劇団が複数登場したこともまた隠れもない事実であった。<sup>11</sup>

このラインナップが発表された際、レゲヴは、改めてヴァイツマンを排除したランクリへの賛意を示し、「この数か月、私たちのやり方の正しさ、豊かな内容を持つフェスティバルの存在の必要性への確信は、様々な党派によるフェスティバルへのボイコットの脅威にもかかわらず、私たち皆にありました」と述べ、新プログラム完成で演劇祭が行われることを喜ぶ旨のコメントを出した。

(同上) ランクリ自身は、ベン・シェルシュ総監督と同様、ボイコット騒動には言及せず、「今年のフェスティバルをアッコーの全ての人々に捧げる」——HPにあるヨセフと同じフレーズ——と述べた。(同上)

ヤッファ劇場で、ヴァイツマンの企画したグリーン・タトゥールのためのイベントが、ナクバ法違反の可能性を指摘されたのはこの数日後のことだった。

9月14日、ヤイル・アシュケナジは、モニ・ヨセフへのロングインタビューを『ハアレツ』ヘブライ語版に掲載した(英語版15日)。その中で、ヨセフは自分に浴びせられた凄まじい誹謗中傷に言及している。新プログラム発表の後、SNS上にはヨセフと新芸術委員会への罵倒、新たに選ばれたアーティストに対する「アマチュア、宗教的」という蔑みがあったことを、ヨセフは「全くのレイシズムの領域」と抗議する。「ある人がキツパ [ユダヤ教徒男性の帽子] をかぶっているからといって、彼はアーティストではないという意味にはならない」(Ashkenazi, Sep. 15)。

ここに至り明らかなことだが、メインプロットはレゲヴと左派演劇人の対立ではなく、この演劇祭をボイコットしたアーティストと、演劇祭を開催したアーティストの間の敵対関係へと移行している。ヨセフは、ボイコットした側を罵倒するのもまたレイシズムであり、自分は「私はレイシズムに反対し、誰のこともボイコットしない」(Ibid.)と断言し、自分是对立の片方の陣営に立つのではないことを強調した。それ自体が誤りでないとしても、結果として、ヨセフの選択は彼自身を「ナチ」と呼ばれるまでに追い込んだ。それは彼が自らをレゲヴの「敵」として自分を位置付けなかったこと、つまりイスラエル演劇全体に対する余りにも露骨な政治的圧力に対して否を唱えなかったことに起因している。

事実、「現在の状況は、『アッコー・フェスティバルにはパレスチナのナラティブのための場所はない』と言ったミリ・レゲヴの主張とは関係ない？」と問われたヨセフは、レゲヴは内容には介入していない、そして自分も彼女を意に介さないと答える。「私は大臣の使用人じゃない。」(Ibid.) アシュケナジは、こうしたヨセフの態度を次のように書いている。

ヨセフは、表現の自由のための戦いをめぐる最近の事件——アル・ミダン劇場での支援停止に続き、ヤッファ劇場に関して文化省から財務省に出された訴え——について問われるときですら動じることがない。こうした出来事の拡大にもかかわらず、恐らくはある種の間違ったナイーブさをもって、彼はその詳細をよく知らない、或いは巻き込まれたくないと言う。(Ibid.)

明瞭な政治的対立の只中に置かれながら、非政治的人間であろうとする——アシュケナジによれば「ある種の間違ったナイーブさ」を持つ——芸術家が、最悪の政治的泥沼にとらわれる。この問題については、我々は改めて慎重に考える必要がある。

開催が間近になった10月2日、『ハアレツ』ヘブライ語版は、右派シオニスト市民団体「我がイ

スラエル」(Israel Sheli/My Israel)が、メーリングリストを通じて支持者にアッコー演劇祭の割引チケットを提供したと報じている。(アシュケナジ、10月2日)

「我がイスラエル」は現教育相ナフタリ・ベネットと現法務相アイエレット・シャケドが2010年に創設した団体で、自らを「インターネット上でシオニズムを推進するイスラエルの運動」と称する。メールは、「様相を変え、バラド支持のアーティストたちを吐き出したフェスティバルが我々を必要としています」として、46シェケルのチケットを40シェケルで提供し、演劇祭に行くようにと促していた(割引額6シェケルは日本円にして195円ほど[2017年11月])。「今年のフェスティバルの内容は多彩で、宗教派、伝統派、[ユダヤ教の]超正統派も含め、新しい観客に開かれています」「フェスティバルの元々の観客はこれをボイコットし、チケットを買っていません。チケット売り上げは低調です。この状況が続くと来年は過激な左派が戻ってきます。それはあってはなりません。」(同上)

奇妙なことだが、この演劇祭はユダヤ・アラブ「共存」という理想を掲げていたがために、今まで「宗教派、伝統派、超正統派」ユダヤ人やシオニストを「排除」してきた。2017年、この人々は初めてこの演劇祭が自らに「開かれ」たと感じたのであるが、そのためにはパレスチナを擁護する左派の「排除」が必要だったのである。

先述したヤッフア劇場での400人を集めた反対集会が行われたのは、アッコー演劇祭開幕を2日後に控えた10月5日のことである。明らかにアッコーに対抗した企画で、映画監督ウディ・アロニ(Udi Aloni)は、「我々はすべての自由なパレスチナの言語と共にアッコーに戻る」と発言している。(アシュケナジ、10月6日)

なおこの集会で、女優サリト・ヴィノ-エラド(Sarit Vino-Elad)がイスラエル国旗を様々な形で体に巻き付けてアピールをおこなったことが国家侮辱に当たるとされ、文化省は財務省にさらにヤッフア劇場のナクバ法違反の懸案を追加した。(アシュケナジ、10月6日)

こうした状況を背景に、10月7日夜から10日まで、2017年のアッコー演劇祭は開催された。

ヤイル・アシュケナジは「参加者はまばら、来ている人々の多くは、専ら宗教的だ、右派だと言われたイベントに対する自分のイデオロギー的支持を見せるために来ている」と報告している。(Ashkenazi, Oct. 11)<sup>12</sup>

今回のフェスティバルは、普段演劇に疎遠な正統派ユダヤ教徒が観客として劇場に足を踏み入れる機会になったことは間違いない。アシュケナジは、そうした新来の観客の声を拾っている。入植地エフラトからやってきた家族の父親は「この国はひどい、ビビ[ネタニヤフ首相]は悪魔だと言いたい人がいても平気だが、政府がそれに助成すべきではない。それについてはレゲヴは正しい」と言い、映画製作を学ぶ彼の息子は「右翼や宗教的劇作家が出るから来たわけじゃない。僕は劇を見に来たので、全部が偏った政治の派閥や大衆を型どおりに描いたものじゃない方がいい」と言う。出演者にしても、同性愛を描いたLO(r)CAの4人の男優たちは、正統派の常識からかけ離

れた下着一枚の姿で舞台に立ったにもかかわらず、観客からとても肯定的な反応を得ていると語った。(同上)

つまり演劇祭としては——皮肉なことに、そのモットー通り、従来とは「別の演劇」のフェスティバルとして——成立はしていた。ただし、こうした国内的事情でやってきた観客には、外国からの招聘作品を見る理由がない。筆者の観劇した、2009年の危機以来の今日のギリシャを批判的に描く *Revolt Athens* (演出：Elli Papakonstantinou [ギリシャ]) と、ダリオ・フォの諧謔的キリスト劇を一人芝居で演じる *Mistero Buffo* (演出：Lyto Triantafyllidou [アメリカ]) は、間違いなくどちらもこの演劇祭で見ることのできた最も優れた舞台だったが、1回の公演の観客は20人にも満たないありさまだった。

レゲヴ大臣は、家族とキューバで休暇の最中で、劇場には姿を現さなかった。(Ashkenazi, Oct. 10)

#### 4. 終わりに代えて

演劇祭の総括として、詩人のナノ・シャブタイ (Nano Shabtai) は「占領は完了し、アッコー演劇祭は死んだ」と題した文章を『ハアレツ』ヘブライ語版に寄稿した。(シャブタイ, 10月15日)

2017年のアッコー演劇祭に絶望するのは簡単である。だがこれまでもそうであったように、2017年の危機を踏み台として、観察と批評を重ねさらに「別の」在り方を模索することも可能であろう。レゲヴの弾圧が今回の事件の主要因の一つであることは疑いがないにしても、そこに全てが還元されるわけでないのが、2017年アッコーが呈示する問題の特徴であり、「別の」演劇的テーマを内包している。

注視すべきは、ヴァイツマンを排除した演劇祭側から「多様性」と「共存」の理想が語られていることである。ギブソンの辞任について、演劇祭マネジメントは「彼が自らの役割を誤解しており著しくプロフェッショナルリズムを欠くことの証」、さらに、「毎年毎年、中心的トピックが手を血に染めたテロリストになるというギブソンの決定は、固定されてしまっ<sup>ギウウン</sup>て、多様化ができないということの証」であると語った。(アシュケナジ, 6月4日) さらに演劇祭は、モニ・ヨセフを芸術監督に選んだ際、「イスラエル社会全体にとって重要な、多様なテーマに力を入れてゆく」と述べ、「アッコー市は演劇と共存<sup>ドワ・キユーム</sup>の信条と理想に向け邁進してゆく」と宣言している。(アシュケナジ, 6月14日)

総監督ベン-シェルシュもまた、ギブソンが当初コンペに選出した9作品のうち4作がパレスチナ人を扱ったものだったことを明かし、「アラブ系以外のイスラエル社会にふさわしい上演を見つけないのが難しかった」と述べた (ベン-シェルシュ, 6月20日)。

問題の根源は、パレスチナ寄りの作品を出品すると出場と受賞の可能性が高まるというメッセージを暗黙のうちに発していた芸術監督ギブソンにあったのだろうか。だが、それならばなぜ、芸術監督交代後に深刻な断絶が起こるのか。10月5日のヤッファ劇場支援イベントに参加してパレスチ

ナの詩を朗読した女優レイダ・アドン (Reida Adon) が「我がイスラエル」の割引チケットについてFBに批判を書いたところ、ベン-シェルシュは次のような返信コメントを書いた。「君は決して共存に貢献しなかった。集団間の対立に貢献しただけだ。君は過激派を支援し、ヤッフアの仲間を宣伝し続けるのだらう、彼らのたった一つの目的はユダヤ人を殺す輩を励ますことなのに。」(アシュケナジ, 10月6日)

境界線で区切られた世界のあちらとこちらで、「共存」の含意はかくも異なる。その境界線はイスラエルとパレスチナの間のみ引かれているわけではなく、イスラエルのユダヤ人社会をも分断しており、その双方の指すところの「共存」は、互いを排除しなければ実現しないと理解されている。だが他者を排除しなければ想定できない「共存」ほど不条理なものがあるだろうか。

6月16日(英語版17日)の『ハアレツ』にはヤイル・アシュケナジによるヴァイツマンのロング・インタビューが掲載されている。その中で、ヴァイツマンは「今、この国には踏み込んではないエリアがあることを学んでいる」と語る。(アシュケナジ, 6月16日)イスラエル社会に様々な形で潜在する、こうした物理的あるいは心理的な進入禁止エリアの前の進入禁止ラインを明るみに出し、揺るがしてゆくことは、イスラエル演劇の最大の可能性である。必然的にアッコー演劇祭も、その本来の理念——「演劇の概念の境界を検証し、押し広げる」——を演劇にとどめることなく拡張することが宿命づけられている。少なくとも、ある種の境界線の向こう側を排除しなければ成立しない演劇に、「別の」あり方を求めることはできない。

## 注

- 1 『パレスチナ, イヤーゼロ』(Palestine, Year Zero)は「フェスティバル/トーキョー17」招聘作品の一つとして、2017年10月27~29日、あうるすぽっとにおいて上演された。邦題、氏名表記はその際のものに倣った。ヴァイツマン略歴についてはフェスティバル HP 参照のこと。[http://www.festival-tokyo.jp/17/program/inato\\_yearzero/](http://www.festival-tokyo.jp/17/program/inato_yearzero/)
- 2 2012年に来訪した折に観劇した作品については以下で報告している。村井「イスラエル/パレスチナ対立への演劇的アプローチ:『シルワンの孔雀』(2012)を中心に」(『共立女子大学・共立女子短期大学総合文化研究所紀要』第21号, 2015)。なお『シルワンの孔雀』は2017年現在も文中触れるヤッフア劇場で上演され続けている。その演出家シナイ・ピテルとヘン・アロンは、2017年のアッコー演劇祭ではボイコット側に回った。
- 3 オデッド・コトレルの経歴は、イスラエルの学術・芸術に多大な貢献のあった人物に送られる以下エメト賞2017年受賞者のページに詳しい。<http://en.emetprize.org/laureates/culture-and-art/acting-and-directing-in-the-theater/mr-oded-kotler/> 欧米では1967年カンヌ映画祭最優秀男優賞の受賞俳優として知られる。
- 4 公式HP (<http://www.accofestival.co.il>)からの引用とされているが、2017年11月現在この文は見当たらない。
- 5 エイン・ホド (Ein Hod) はハイファ市のカルメル山麓の小村。ダダイズムの創始者のひとり



- でもあるユダヤ系ルーマニア人の構成主義画家・建築家マルセル・ヤンコ (Marcel Janco, 1895-1984) が中心となり、1953年から芸術家コロニーとして運営されている。(http://www.ein-hod.info/)
- 6 第1次インティファダ時の芸術監督で、2017年の運営委員を抗議辞任したシモン・レヴィも、2008年のキャンセルが不要であったと認識し、市の態度に不信を示している。(レヴィ, 2017年5月28日)
  - 7 同記事では排除決定は「市長と副市長アドハム・ジャマール (Adham Jamal) と相談の結果」としているが、ジャマール副市長本人はそうした合意があったこと自体否定している。(アシュケナジ, 5月24日)
  - 8 モニ・ヨセフは2000年と2009年にアッコー・シアター・センター『アンソロジー』(http://www.theaterx.jp/09/090302.shtml) で俳優として来日、劇団銅鑼の『ハンナのかばん』(2009) では演出家を務める。
  - 9 <http://www.accofestival.co.il/index.php?dir=site&page=content&cs=3030>
  - 10 フェスティバルの公式 HP にてこれら作品の簡単な紹介を公開している [2017年12月1日現在。ただし情報は毎年その年の内容で上書きされるため継続的公開は通例されない]。  
<http://www.accofestival.co.il/index.php?dir=site&page=articles&op=category&cs=3084>  
なお同ページに記載されている作品 *Lost items* は、演劇祭作品としてではなく特別イベント枠で上演されたもので、この日のプレス発表にもなく、筆者も観劇していない。
  - 11 少なくとも『ハアレッツ』は、英語版においても、二作が西岸の入植地の劇団のものであることを、地名と共に——*WoMan* の「マタラ」はアリエル市立劇団であり、*The City of Fortune* はテコアの劇団の作である——明記している (Ashkenazi, Sep. 15)。ただし本論は、イスラエル国内において入植地出身の劇団が活動することについて不当視するものではない。入植地に生まれ育ったがゆえに地域で劇団を形成し公演をすることが妨げられ、正当な評価も受けられないのだとすれば、それは別の人権侵害に当たるだろう。ここで論者が注意を促したいのは、占領を問題視する作品の排除と同時に、入植地の存在を自明とするような傾向が生じたことであり、作品の評価は別として、個々の劇団の存在と出場に対する糾弾を含むものではないことを強調しておく。
  - 12 ただし「初めてこの演劇祭に来た」という WEB 新聞 *Arutz Sheva* の英語のレポートは「選んだ劇はどれも世俗的イスラエル人だけでなく宗教的シオニストの家族で一杯で、一つの空席もない」とし、観劇した4作品について非常に肯定的な印象を伝えている。(Sylvetsky, Oct. 24) 筆者の印象では、全体として演劇祭全体の観客数は少ないが、宗教的背景を明示した作品に限ってはほぼ満席であったことを追記しておく。

【引用文献】 ※ヘブライ語文献は日本語訳で記した。

■ *HaAretz* 英語版 (<https://www.haaretz.com/>) ※掲載日順

- Zhipi Shohat, “ ‘Not a time for celebrations,’ says Acre mayor, as theater festival is cancelled.’ Oct. 12, 2008.
- Yair Ashkenazi, ‘New culture minister says won’t let Israel’s image be ‘ndermined’ for sake of pluralism.’ May 18, 2015.
- Haaretz Editorial, ‘Forcing Israeli Arab culture to conform - or wither.’ May 10, 2015.
- Yarden Skop and Yair Ashkenazi, ‘Education Ministry set to pull controversial Arab play from school repertoire.’ Jun 1, 2015.
- Yair Ashkenazi, ‘Despite political attacks, Israeli Arab theater returns, unbowed.’ Jan. 9, 2017.
- Itay Stern, ‘After Israeli Arab actor refuses to perform in Jordan Valley, culture minister threatens to cut funds.’ Jun. 9, 2017.
- Itay Stern, Yarden Skop and Yair Ashkenazi, ‘Israeli Arab theaters under fire for terrorism play, refusing to perform in West Bank settlements.’ Jun. 10, 2015.
- Yair Ashkenazi, ‘I realized I’ m not living in a democracy,’ says director of play inspired by terrorist’s life.’ Jun. 11, 2015.
- Michael Handelzaltz, ‘Theater funding and the boomerang effect.’ Jun. 18, 2015.
- Noa Shpigel and Yair Ashkenazi, ‘Culture Minister Regev orders play vetted for ‘insulting state symbols.’ Oct. 7, 2016.
- Yair Ashkenazi, ‘Israeli minister vows to investigate ‘disrespect’ for national anthem at fringe theater.’ Nov. 11, 2016.
- Yair Ashkenazi, ‘Despite political attacks, Israeli Arab theater returns, unbowed.’ Jan. 9, 2017
- Yair Ashkenazi, ‘Banned play on Palestinian prisoners, occupation throws Israeli theater festival into turmoil.’ Jun. 5, 2017.
- Noa Shpigel and Yair Ashkenazi, ‘Israeli artists scolded: Enough about the occupation, there are other stories in Israel.’ Jun. 7, 2017.
- Yair Ashkenazi, ‘Does the Israeli playwright who celebrates Palestinian prisoners support terrorism?’ Jun. 17, 2017.
- Yair Ashkenazi, ‘Israel weighs cutting funding to Jaffa Theatre over alleged incitement.’ Sep. 6, 2017.
- Judy Maltz, ‘In first, Israel threatens to cut theater’ s funding over show for Palestinian poet.’ Sep. 6, 2017.
- Haaretz Editorial, ‘Escalation in Israeli minister’s culture war.’ Sep. 8, 2017.
- Yair Ashkenazi, ‘Head of iconic Israeli theater festival unfazed by pressure to quit over banned play about Palestinian prisoners.’ Sep. 15, 2017.
- Yair Ashkenazi, ‘Rain and politics take their respective tolls on top Israeli theater festival.’ Oct. 11, 2017.

■ *HaAretz* ヘブライ語版 (<https://www.haaretz.co.il/>) ※掲載日順

ヤイル・アシュケナジ「コンペ参加アーティスト、政治囚の劇がコンペから除外されたことに抗議」2017年5月16日。

ヤイル・ヴァルディ「アッコー・フェスティバルのディレクターと出品アーティストは抗議のために辞任すべきである」2017年5月21日。

ヤイル・アシュケナジ「アッコー・フェスティバル“多様化と町の住民への考慮がしたい”がための政治ショーと化す」2017年5月24日。

シモン・レヴィ「なぜ私はアッコー・フェスティバル運営委員を辞したか」2017年5月28日。

ヤイル・アシュケナジ「アッコー・フェスティバルのアーティストら：失格の占領劇が上演されなければならぬなら参加しない」2017年5月30日。

ヤイル・アシュケナジ「占領劇失格に続き：アッコー・フェスティバル芸術監督辞任」2017年6月4日。

ノア・シュピゲル「レゲヴ『どんな演劇が出てくるか、過激派が私たちに指示することはありえない』」2017年6月6日。

ヤイル・アシュケナジ「カメラ劇場俳優、アッコー・フェスティバルのアーティストらと連帯のメッセージを読み上げる」2017年6月6日。

ヤイル・アシュケナジ「アッコー演劇祭危機：辞任のギブソンに代わり執行部がモニ・ヨセフ指名」2017年6月14日。

ヤイル・アシュケナジ「イナト・ヴァイツマンは、アッコー・フェスティバルを解体し、テロリストを支援したか？」2017年6月16日。

ラミス・アマル「アッコーの新芸術監督はこの町のアラブの口封じに協力している」2017年6月18日。

アルベルト・ベン-シェルシュ「アッコー・フェスティバルに選ばれた9本の劇のうち4本がパレスチナ人のためのもの、これを多様性と呼ぶか？」2017年6月20日。

ヤイル・アシュケナジ「アーティストのボイコットにも負けず：来たるアッコー・フェスティバルでオリジナル8作品上演」2017年8月27日。

ヘン・アロン「来たるフェスティバルは正当なイベントではない」2017年9月4日。

ヤイル・アシュケナジ「ベネットとシャケドにより設立された『我がイスラエル』運動、アッコー演劇祭の割引チケット提供」2017年10月2日。

ヤイル・アシュケナジ「ナクバ法違反を問われるヤッファ劇場支援に数百人のアピール」2017年10月6日。

ヤイル・アシュケナジ「レゲヴよりカハロンへ：ヤッファ劇場の支援イベントはナクバ法に抵触しないかチェックを」2017年10月9日。

ヤイル・アシュケナジ「アッコー・フェスティバル：政治と雨が劇場を打ちのめした」2017年10

月10日。

ナノ・シャブタイ「占領は完了し、アッコー演劇祭は死んだ」2017年10月15日。

■その他

Bernstein, Daniel, 'Regev backtracks on cuts to Arab-Jewish theater.' *The Time of Israel*, Jun. 12, 2015.

<https://www.timesofisrael.com/regev-backtracks-on-cuts-to-arab-jewish-theater/>

Cohen, Maya and Yael Branovsky, 'After Controversy: Elmina Theater to perform in Jordan Valley.' *Israel Hayom*, Jul. 20, 2017.

<http://www.israelhayom.com/2017/07/20/after-controversy-elmina-theater-to-perform-in-jordan-valley/>

Reiter, Yitzhak, *National Minority, Regional Majority: Palestinian Arabs Versus Jews in Israel*, Syracuse University Press, 2009.

Rokem, Freddie, *Performing History: Theatrical Representations of the Past*, University of Iowa Press, 2000.

Shem-Tov, Naphtaly, *Acco Festival: Between Celebration and Confrontation*, Academic Studies Press, 2016.

Sylvetsky, Rochel, 'High Drama in Acco.' *Arutz Sheva*, Oct. 24, 2017. <https://www.israelnationalnews.com/Articles/Article.aspx/21171>

クラウス, ヤイル「アッコー市長の指示—「占領」の劇キャンセルされる」『NRG』2017年4月26日。 <http://www.nrg.co.il/online/1/ART2/875/542.html> (ヘブライ語)

村井華代「イスラエル／パレスチナ対立への演劇的アプローチ：『シルワンの孔雀』（2012）を中心に」『共立女子大学・共立女子短期大学総合文化研究所紀要』第21号，2015年。